

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	セフェリスが手がけた翻訳作品 T.S.エリオット作『荒地』より 「Ⅰ.死者の埋葬」、「Ⅱ.チェスの試合」〈研究ノート〉
Author(s)	佐藤, りえこ
Citation	プロピレア , 20 : 30 - 38
Issue Date	2014-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039090
Right	Copyright (c) 2014 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



セフェリスが手がけた翻訳作品
T.S.エリオット作『荒地』より
「Ⅰ.死者の埋葬」、「Ⅱ.チェスの試合」

佐藤りえこ

0. 『荒地』との出会い

セフェリスが翻訳した外国の文学作品の中に、T.S.エリオットの『荒地』がある。エリオットが詩集『荒地』を出版したのが1922年、セフェリスがその翻訳を出版したのが1936年と、他に先駆けギリシャの文学界にエリオットを紹介したセフェリスの功績は大きい。その後、1948年にエリオットがノーベル文学賞を受賞したこと受け、セフェリスの翻訳詩集は翌年に第2版、1964年に第3版と版を重ね、1973年に決定版が出版される。この決定版には『荒地』のギリシャ語訳の他に

- ・三編の訳詩
- ・エリオットとの親交を記したセフェリスの日記からの抜粋
- ・R.マーチ＝M.J.タンビムツ共編の『T.S.エリオット論シンポジウム』に1948年トルコのアンカラからセフェリスが寄稿した「ある外国の友への手紙」（以下「手紙」）が収められている。

この「手紙」の中で、セフェリスはいつ、どのようにしてエリオットの作品、とりわけ『荒地』と出合ったのかについて触れている。

…1931年クリスマスの数日前。オックスフォード街の書店にて、クリスマスカードを眺めていた。多色刷りの石版画のなか、はじめてエリオットの詩をそのとき手に取ったのである。『精霊詩集』の「マリーナ」であった。

（「手紙」p.44、以下、訳は佐藤による）

「マリーナ」はシェイクスピアの史劇『ペリクリーズ』第5幕第1場に着想を得た作品で、亡くなったと思っていた娘マリーナと老いたペリクリーズが再会する場面が描かれている。

当時ロンドンのギリシア領事館に勤務していたセフェリスは、大英博物館に展示されている大理石像や、ナショナル・ギャラリーの壁に掛けられたエル・グレコの筆による肖像画などで、望郷の思いを紛らわせていた。エリオットが詩の中に描く海岸や船などは、セフェリスにとって異国で思いがけず出合った馴染のある故郷の風景そのものであった。そしてセフェリスは「マリーナ」の中の地中海的な様相に魅了され、エリオットに接近していく。

…ゆっくり進む孤独な船は、エリオットの詩にみられる最も豊かな特徴の一つとして私の心に刻まれた。(「手紙」p.44)

…このことが奇妙に思えるというのなら次のように考えるべきかもしれない。別の子どもたちにとってのサッカーボールの形や先祖の写真と同じように、私たちの多くの者たちにとって、船が少年時代の心象風景の中である場所を占めているということ。(「手紙」p.44)

ではいったい、『荒地』の何がセフェリスを捉えたのだろうか。エリオットは『荒地』のエピグラフに、ペトロニウス作『サテュリコン』から「トリマルキオンの饗宴」48節のトリマルキオンの言葉を引いている。

…ペトロニウスの「シビュラよ、何を欲するのか」という一節が『荒地』を一読する気にさせた。(「手紙」p.44)

シビュラはアポロンの神託を伝える巫女である。一握りの砂の数ほどの長寿をアポロンから与えられたがゆえに、老いさらばえてもなお生きなければならない。シビュラが欲するのは「死ぬこと」である。とりもなおさず、死は、不毛の生、復活とともに『荒地』のテーマでもある。

すでにフランスにおいて、ダダイズムやシュールレアリスムの緊張を伴った文学的なうねりを体験したセフェリスはエリオットの『荒地』に「劇仕立ての伝統」が復活したことを見てとる。そして『荒地』「I 死者の埋葬」の終わりの会話部分を挙げながら、次のように述べている。

…「マリーナ」の地中海的な登場人物の他に、とても深淵な何か、ひとりのギリシア人を共感させずにはいられない何か—すなわち悲劇の要素—を私にもたらすべく、エリオットのこの詩はやって来たのだった。(「手紙」p.45)

セフェリスは『荒地』に「幸福な時代によく知っていた渇きの感覚」を見出し、深く共感し、これを受け入れる。それと同時に詩の中で「渇ききった絶望」を生身の人間が演じるというエリオットの描出技法に魅了されていくのである。

1. 翻訳の動機と翻訳の「効果」

セフェリスがエリオットに接近するきっかけになった作品がエリオットの「マリーナ」で、次いで『荒地』に深い感銘を受け翻訳を手掛けることになる。「手紙」の中でセフェリスは、エリオットの『荒地』と若干の別の詩を翻訳しようと試みた理由を二点、明らかにしている。

…第一に、作品から得た共感を表現する方法が他になかったから。第二に、私の言葉の耐久力を試してみるためだった。(「手紙」p.51、下線は佐藤による)

注目されるのは、エリオットの作品への共感を表現する手段にセフェリスが選んだ翻訳という方法は、ギリシャ語を鍛錬する方法でもあるという点である。セフェリスは翻訳がギリシャ語の「耐久力」を試す方法であり、翻訳を通して言葉の表現の可能性を模索しようと意図していたということである。

しかしながら翻訳を始めた頃を振り返り、セフェリスは当初の目論見を次のように評している。

…思えば12年を経た今、それは思慮の足りない試みであり、読者よりも私の方がずっと得るものが多かったのである。(「手紙」p.51)

セフェリスの自己評価はかなり謙遜したものだと言えよう。1936年の翻訳詩集『荒地』に前後して、セフェリスは『転回点』(1931年)、『貯水槽』(1932年)、『神話物語』『余白の下描き』(1935年)、「ギムノペディア」(1936年)、『練習帳』(1940年)と詩集を次々に発表する。言葉の可能性を模索する翻訳という作業を通してセフェリスがエリオットから吸収したものが、セフェリス自身の作品の中で結実したことは想像に難くない。セフェリスが翻訳した『荒地』がギリシャの文学界に資するものは、甚大であったことは確かである。

2. 翻訳にみられる装置

翻訳詩集『荒地』の中から「Ⅰ. 死者の埋葬（以下「埋葬）」と「Ⅱ. チェスの試合（以下、「チェス）」を対象に、セフェリスがいかにして言葉の耐久力を試そうとしたかを探ってみたい。

2.1 固有名詞の訳出方法

「埋葬」も「チェス」も会話で構成される部分を持つ。劇仕立ての作品では。登場人物の名前や舞台設定に関わる固有名詞は、役割や性格、場面を表出する記号とみなすことができる。「埋葬」と「チェス」の固有名詞は、次の五種類の方法のいずれかでギリシャ語に訳出されている。なおギリシャ語は必要がある場合を除き単数主格形にし、アクセントは現代ギリシャ語の単一アクセントに直してある。

①ローマ字からギリシャ文字への転写

・地名

Sarnbergersee : Σταρνμπεργκερζε（「埋葬」 8 行目）

Hofgarten : Χόφγκαρτεν（「埋葬」 10 行目）

King William Street : Κίνγκ Ουίλλιαμ Στρήτ（「埋葬」 66 行目）

・人名

Belladonna : Μπελλαντόνα（「埋葬」 49 行目）

Stetson : Στέτσον（「埋葬」 79 行目）

Lil : Λίλ（「チェス」 139 行目）

Bill : Μπίλ（「チェス」 170 行目）

Lou : Λού（「チェス」 170 行目）

May : Μαίη（「チェス」 170 行目）

②ギリシャ文字に転写した固有名詞にギリシャ語に翻訳した語を並置

London Bridge : Γιοφύρι της Λόντρας（「埋葬」 62 行目）

Madame Sososttris : κυρία Σόζοστρις（「埋葬」 43 行目）

Saint Mary Woolnoth : Παναγία Γούλνοθ（「埋葬」 66 行目）

下線部はギリシャ語に翻訳された語を示す。

この三例のほかにも固有名詞からの派生語をギリシャ語に転写した例も見られる。

Shakespeherian Rag : Σαιζπηγήρειο τούτο φοξ（「チェス」 128 行目）

Shakespeherian は形容詞 Shakespearian をもじったもので、セフェリスはこれをギリシャ文字に転写しさらに語尾をギリシャ語の形容詞の語尾に変えている。一方の ragtime を縮約した rag は、ジャズの前身となる音楽を指す言葉である。シンコペーションのリズムを多用する rag の音楽に合わせて踊るために foxtrot というステップが生まれた。セフェリスは rag ではなくこの foxtrot に由来する φοξ を翻訳に用いている。

旧約聖書の詩篇に出てくる fox (第 63 篇 10) には「山犬」という意味がある。「山犬」fox(φοξ)は『荒地』の「埋葬」74 行目の「犬」を連想させる。「犬」は死体を掘り起こしてしまうので、死者の甦りを妨げる存在である。「チェス」125 行目の一節 Those are pearls that were his eyes は「埋葬」48 行目の繰り返しで、死者の眼が海水によって真珠に変容する一種の再生を表している。この一節はシェイクスピアの『あらし』から引用されている。翻訳においてセフェリスが Σαιξηπήρειο φοξ という語句を採用したのは、Σκυλί 犬・λείψανο 死体・μαργαριτάρια 真珠という一連のモチーフが『荒地』のテーマである死と再生を表していることを示そうとしたからではないだろうか。

余談になるが、日本語訳では「シェイクスピア的ジャズ」(西脇訳)「シェイクスピアまがいのジャズ音楽」(越沢訳)と rag をジャズに関連付けるものと、「シェイクスピアの文句」(吉田訳)「シェイクスピアまがいのあのぼろっ切れ」(深瀬訳)のように意識しているものがあり、訳語がさまざまである。

③該当するギリシャ語を採用

ギリシャ・ローマ神話に登場するキューピッドやフィロメーラには、ギリシャ神話において該当する名前が用いられている。またギリシャ語由来の英語名も元のギリシャ語の名前が当てられている。

Cupidon : Ερωτιδέας (「チェス」80 行目)

Philomel : Φιλομήλα (「チェス」99 行目)

Marie : Μαρία (「埋葬」15 行目)

George : Γιώργης (「チェス」160 行目)

「埋葬」8～18 行目に記述されている「櫓遊び」に登場するマリーは実在のマリー・ラリッシュ侯爵夫人だとされる。マリー本人からエリオットが聞いた櫓遊びのくだりは、オーストリア＝ハンガリー帝国の消滅を回想させるという

指摘もある。マリーと彼女の従兄でオーストリア皇后の息子であるルドルフとの会話は、セフェリスの翻訳では登場人物の名前が Marie から Μαρία になることで、日常のごくありふれた仲の良い男女の会話に読み変えることが可能になるのではないだろうか。

④無関係な語を採用

Albert : Γιάννης (「チェス」142 行目)

⑤その他

Mrs. Equitone : κυρία Ισοψάλτου (「埋葬」57 行目)

セフェリスは、まず Equitone を equi-と tone に分け、前半は equi-と同じ「等一」という意味の ισο-を、後半は tone を意識して「詠唱者」という意味の ψάλτης を用いて複合語を作り、さらに女性の名字になるよう属格形にして用いている。ちなみに日本語訳では「エキイトーン夫人」(岩崎)、「エキイトーンさんの奥さん」(越沢・深瀬)、「エキイトンさんの奥さん」(西脇)、「エキイトオンさんの奥さん」(吉田)のように発音をカタカナで転写している。

2.2 『荒地』のテーマ：死と再生

上で見た固有名詞の訳出方法の中で、Albert に当てた Γιάννης という人名に注目したい。なぜ Albert の訳語として Γιάννης という名前を用いたのだろうか。まず、考察に入る前にエリオットの『荒地』のテーマを整理しておきたい。

題名の「荒地」は当然第一次世界大戦後のヨーロッパを象徴すると同時にエリオット自身の個人的な生活も表現する言葉であることは、一般に論じられている意見である。そしてその主題は「荒地」の救済であるが、結論として描かれているのは情緒的・精神的また知的な生命力の再生であり、それも確実なものとしてではなく、可能性として提示することである。(中略)そこにはキリストの死とその復活が暗示されていることは言うまでもない。

(越沢 p.67、下線は佐藤による)

エリオットは自然界における四季の繰り返し、古代の豊穡神話、宗教における死と復活のパターンを重層的に利用しながら「死と再生」というテーマを展開させていく。

2.3 伏線としてのキリスト教

①Son of man : Γιέ του ανθρώπου

先に触れたマリーと従兄の会話に続く「埋葬」20行目には Son of man という語句が出てくる。エリオットは原注で旧約聖書「エゼキエル書」第6章4節が出典となっていると記している。「エゼキエル書」の中で神は何度となく預言者エゼキエルに「人の子よ」と呼びかけている。エリオットの Son of man という語句は、広くアダムの子孫＝人間を指すという解釈もある。「埋葬」にでてくる Son of man は固有名詞ではないものの、この語句と「死と復活」のテーマとの関連を考えた。

2.1 で Marie (マリー・ラリッシュ侯爵夫人) をセフェリスは Μαρία と訳したことを指摘した。ギリシャ女性の名前の中で最もポピュラーな名前である Μαρία は侯爵夫人の上流階級的な雰囲気のある会話を日常的な会話に変える装置だと考えられる。それと同時に、処女のままイエスを生んだ聖母マリアをも連想させる選択だと言えないだろうか。

「埋葬」66行目でセフェリスは聖母マリアに関わる別の語 Παναγία を用いている。銀行員であったエリオットが通勤の途中いつも前を通っていたセント・メアリー・ウルノス教会 Saint Mary Woolnoth は、Παναγία Γούλνοθ と訳されている。Γιέ του ανθρώπου を挟むように、その前後に Μαρία と Παναγία とが出てくるのは偶然だろうか。新約聖書においてイエスが「人の子」と呼ばれていることを思い起こすなら、Γιέ του ανθρώπου に新約聖書の「イエス」を想起させるというセフェリスの意図が浮かび上がる。Γιέ του ανθρώπου を「人の子」預言者エゼキエルではなく「十字架に掛けられ甦ったイエス」と読み変えることで、『荒地』のテーマ「死と復活」との関係が明白になってくる。

②Albert : Γιάννης (「チェス」142行目)

「チェス」の後半には、現代の無教養で貧しい労働者階級の人々が描かれている。復員兵の主人を待つ妻リルとその友人の場末のパブでの会話は、閉店を告げる主人の台詞“HURRY UP PLEASE ITS TIME”に何度か中断されながら展開する。出産に結びつかない不毛な性行為がこの会話の話題である。避妊の失敗、墮胎による早老。歯が抜けて変わり果ててしまったリルに向かって、「もつと、身ざれいにしたら」と忠告する友人。

場末のパブでの会話を演出するために、セフェリスはトルコ語起源の語句や口語的な表現を積極的に使用している。

Now Albert's coming back, make yourself a bit smart.

Τώρα που γυρίζει ο Γιάννης, κοίταξε να σουλουπιαστείς λιγάκι. (142 行目)

アルバートが帰ってくるんだから、もうちょっとスマートになさいよ。(岩崎訳)

以下、下線は佐藤による

σουλούπι + πιάνω : σουλούπι < üslüp トルコ語「ふるまい」→外見

You *are* a proper fool, I said.

Είσαι ντιπ άμυαλη, της είπα. (162 行目)

あんた、ほんとに馬鹿よ、って言ってやった。(岩崎訳)

ντιπ : < dip トルコ語「底」→全く

Well, Albert won't leave you alone, there it is, I said,

Το λοιπόν, αν ο Γιάννης δε σ'αφήνει ήσυχη, εδώ'ναι ο κόμπος, της λέω (163 行目)

ね、アルバートがあんたを放つとかないなら、そこじえないの。(深瀬訳)

What you get married for if you don't want children?

Τί πας και μου παντρεύεσαι σα δεν τα θέλεις τα παιδιά;

子供が欲しくもないのにさ、結婚するお婆かさんがどこにあるの? (深瀬訳)

このあたりで保留にしておいた問題—なぜ Albert の訳語に Γιάννης を用いたのか—に立ち返ろうと思う。セフェリスは「埋葬」と「チェス」を訳すさいに Albert をギリシャ文字に転写せず、まったく語源的に無関係な Γιάννης に置き換えている。Γιάννης は聖書ギリシャ語のヨハネ Ιωάννης にあたり、ヘブライ語ヨハナン *Yōhānān* に遡る。この名の意味は「ヤハウエは恵み深きかな」である。

ヨハネの名前は中世において特に人気のある名前になった。(中略)
救世主の到来が近いことを告げ、神の国への道を整えるために人々に洗礼をほどこした人物ヨハネが、自分たちの罪の許しを神にとりなしてもらうのにもっともふさわしい聖人と考えたのである。神へのとりなしを願う人びとにとっては洗礼者ヨハネはマリアに次いでイエスにもっとも近い聖人であった。中世からルネサンス期の絵画にはマリアを中心にイエスとヨハネがいる聖画が描かれ、それらはイエスとヨハネの親密さをよく表している。(梅田 pp.16-17)

先に、セフェリスが固有名詞の使用に施した装置を基督教の文脈で読むと Γιέ του ανθρώπου をイエスと捉えることができた。ここでも同じように、リルの許に戻ってくる Albert を「罪の許しを神にとりなす」Γιάβνης にした意図を新約聖書の文脈で読み直してみよう。自然界の「死と再生」のサイクルを人工的に狂わすという罪、すなわち墮胎を繰り返すリルに、Γιάβνη の帰還という贖罪の機会が訪れようとしている場面で、友人は Γιάβνη のとりなしが上首尾に終わるよう若返りをリルに勧めるという展開が読み取れる。しかし友人の口調によりリルがなかなか乗り気にならないことが分かる。ここに「死と再生」の歯車が狂い始める予兆も見られるのではないだろうか。

3. まとめに代えて

エリオットの『荒地』をセフェリスがギリシャ語に翻訳するさいに、言語の「耐久力」をセフェリスは試そうとしたこと、翻訳の中に仕掛けられた読みのための装置、『荒地』のテーマ「死と再生」の描出と変調を見てきた。

今回の分析は、主に固有名詞の訳出に焦点を当ててみた。視点を語彙全体に広げて、セフェリスの最初の目論見—「ギリシャ語の耐久力」を探る試み—を、追体験してみたい。

参考文献

・テキスト

Θ.Σ.ΕΛΙΟΤ Η ΕΡΗΝΗ ΧΩΡΑ μετάφραση Γιώργου Σεφέρη ΙΚΑΡΟΣ 1997

T.S.ELIOT *Collected Poems 1909-1962* Faber and Faber London 1989

・翻訳

岩崎宗次訳『荒地』岩波文庫 2011年

越沢浩訳・解説『T.S.エリオット『荒地』を読む』勁草書房 1992年

西脇順三郎訳「荒地」『定本 西脇順三郎全集Ⅳ』筑摩書房 1994年

深瀬基寛訳「荒地」『エリオット全集 I 詩』中央公論社 1962年

吉田健一訳「荒地」『現代世界文学全集 26』新潮社 1954年

・そのほか

梅田修『ヨーロッパ人名語源事典』大修館書店 2000年